

演心力～広げよう演劇の輪～

講評速報 14号

12月26日(木)

【愛知】	愛知淑徳高等学校
学校	
<p>「先生に教わったとおりに勉強したら、ちゃんとなつちやうんです」</p> <p>学校の定期テストで全く同じ答を書いた生徒たち。でもカンニングなんてバカなマネはしない。先生の示す学習目標がどれだけ達成されたかを見るのがテストであるならば、問題は初めからみんなわかっている。だからみんな同じ答案になる。これが先生の求めてたことじゃないの？</p> <p>幕が上がって最初に目に入ったのが白で統一された机とイス。大黒幕前に吊された複数の白い仮面には不気味さを感じた。白黒上下の衣装を着た先生3人は髪型も同じで、規則や統一を象徴していると考えられる。「メトロノームの音」が生み出す規則性は、観客をも操っているかのようだった。序盤はゆっくりだったが、物語が進むにつれ徐々に速くなり心臓の鼓動とシンクロするような感覚に陥り、圧迫感を覚えて居心地が悪くなった。</p> <p>発声や動きがしっかりできているため、「先生」は先生らしく「生徒」は生徒らしく見えた。中盤以降に見られる舞台の上下(かみしも)対称の演技を見ても、豊富な練習量に裏打ちされた演技力の高さが感じられた。</p> <p>「仮面」は無個性の象徴だろうが、吊された仮面の表情はよく見ると一つ一つ微妙に違っているため、個性の現れと取ることもでき矛盾を感じた人もいた。</p> <p>最初は抵抗していたように見えた生徒たちも、かなり早い段階で動きや口調が人間味の感じられない機械のような存在となり、見ている側は違和感や不安感を抱いた。</p> <p>テストの場面では、巡視している先生の動きと、消しゴムを落としたりくしゃみをしたりする生徒の動きが見事にシンクロしていて、よりいっそう統一感が顕著になった。これを表現できたのは、キャストたち一人一人の意識の高さと努力あつてのことであろう。</p> <p>〈学校〉を社会の縮図としてとらえ、規則に縛られ個性が喪失し画一化していく現代社会の問題点を、今に生きる私たちに鋭く突きつけた劇だった。先生が生徒の理想像を求め続けた結果、生徒たちだけでなく自分たちまでもが統一されていく展開には底知れぬ恐怖を感じた。</p> <p>名簿や学校の至る所から生徒の名前が消え、登場人物たちが次々と白い仮面を着けていった最後に、客席に強く照射された白い光は、観客に対しても白い仮面を強制的に貼り付けたような効果があった。この劇のラストは、会場内にいる全員の個性が完全に喪失した瞬間だったの「かも、ね」。</p>	